

『海賊バンジーと氷壁の王冠』

作・演出 春田鮎



登場人物

バンジー・・・海賊ホエール族の末裔
スカイ・・・バンジーの相棒
マリネ・・・陽気なピエロ
ダンス・・・バンジーの元恋人
アボカド・・・くいしん坊のコック長
キース・・・考古学者 バンジーの宿敵
アバズレ・・・海賊亡霊
ホーキング・・・キースの新しい助手
セイレーン・・・海の精霊
ノマド・・・地の神
オルカ・・・海の神
ウイング・・・風の神
ステラ・・・星の神
コスモ・・・氷壁の王女
コア・・・古代ロボット

王

王家の兵士

追手たち

ペンギンズ

◆プロローグ

吹き荒れるブリザードの中、追手から逃げてくる王女。
徐々に王女を追い詰めていく追手たち。
ついに捕まった王女は処刑されてしまう。
王女の亡骸を見つけた王は、悲しみの咆哮をあげ愛する娘を抱きしめる。
王女を自らの王冠と共に氷の中に埋葬し、王は己の胸に剣を突き刺した。

M 氷壁の王冠

◆その1

閉ざされた氷の世界。氷河の空間。

薄汚れた髪に長く伸びた髭の男（バンジー）がうろついている。

腕や首、腰には煌びやかな宝物をぶら下げている。

氷の壁を掘り、何かを探している。

しかしなかなか、見つからない様子。

なおも掘り続ける男。

そこに人が来る気配。

隠れる男。

ノマド、オルカ、ウイング、ステラが現れ、男を探す。

ノマド「ここにはいないか・・・」

逃げようとする男。

オルカ「あ！いたわよ！」

ウイング「まで！逃げるな！」

追い回される男。

しかし、まんまと逃げる男。

ステラ「待て！」

ノマド「追うぞ！」

男を追っていくノマドたち。

男を見失い戻ってくるノマドたち。

ノマド「くそっ！また逃げられたか」

オルカ「あいつ・・・いったい何者なの！？」

ウイング「わからない、けど何としても捕まえないと」

ステラ「どうしたらいいの？このままじゃいつか」

ノマド「わかっている、けど今のままじゃ何もできない・・・」

ウイング「人間の体を手に入れないと、奴を捕えることも殺すことも出来ないのか・・・」

オルカ「また探しに行きましょうよ、もしかしたらまだどこかに生き残ってる人間たちが」

ステラ「無駄よ。この南極大陸から人間は完全に消え失せたわ。ここにいるのは、私たちと、あの男だけ」

ノマド「とにかく早いところあいつを見つけて、氷壁を掘るのをやめさせるんだ。そうじゃないとこの南極大陸は・・・」

◆その2

南極大陸の海岸。荒れ模様の海。

寒さに震えながら誰かを待つアバズレ

アバズレ「あががが・・・寒い・・・いくら亡霊でも、この寒さじゃ凍って死んじゃう・・・なーんて、寒さとか感じてみたーい。海賊亡霊だから全然寒くないし、なんだったら骨がキンキンに冷えてむしろ快適みたいな？だってだって可愛い女の子が寒がったりしてたら、いかした男性が後ろから優しく抱きしめてくれる・・・イヤー、最高！バックハグ最高！寒くなりてー」

そこに海から上がってくるセイレーン。

セイレーン「ぶあふあー！！」

アバズレ「キヤー、出たー！！」

セイレーン「くそっ！鼻水まで凍ったわ」

アバズレ「なになに？白熊？セイウチ？それともキングペンギン！？」

セイレーン「私よ！私！セイレーン！」

アバズレ「セイレーン！海の精霊セイレーンがどうしてこんな所に！？」

セイレーン「どうしてじゃないわよ！？あなた、兄弟たちにも内緒で、こっそり海底の城から逃げ出したでしょ？調べはついてるのよ！」

アバズレ「そ、それは・・・」

セイレーン「いいのいいの、たまにはいいのよ、何百年もあなたたちを海の番人として海底に縛

り付けてきたわけだし、絶対に離れてはいけないとは言っていないわ」

アバズレ「ありがたきお言葉！私は常に海の平安を望み、セイレーンの言いつけを守らんと日夜寝食も忘れ、あ、亡霊だから食事はしませんが、とにかく、全身全霊をかけて七つの海のために」

セイレーン「嘘おっしやい！では聞くけど、あなた何のためにここに来たの？」

アバズレ「あ・・・えっと・・・」

セイレーン「ほら見なさい！3年前は大目に見たけど、今回は許しませんよ」

アバズレ「そんな・・・」

そこにシャーク号が到着する。

凍った海が船で割られ、海水面が裂けていく。

アバズレ「あ、船よ！ひゃ！氷が割れた！」

セイレーン「ちよっと、つかまらないで・・・離して！」

アバズレ「だめ！やっと髪の毛セット終わったとこなんです！」

セイレーン「やめて・・・離してってば！」

アバズレ・セイレーン「わ、わ、わ・・・落ちるー！」

揺れた氷から海に落ちるアバズレとセイレーン。

新しい部下、ホーキングを従がえて現れるキース。

キース「ガジガジガジガジ（寒さで歯が鳴る）・・・おととととと、やっと着いたぞ」

ホーキング「わー！ここが夢にまで見た南極大陸ですね！そうですよね？キース博士！」

キース「そのとおりが・・・しかし、君、寒くないのかね？」

ホーキング「いいえ、全然！この旅のために新しいコートを開発してきたんですよ」

キース「新しいコート？」

ホーキング「はい。繊維に微量のコバルトを織り込んでおりまして、出発前、コートにタキオンを照射しておきますと、素粒子が衣類の中を無限に駆け巡ることにより半永久的に熱を持ち続け、したがってこのような極寒地でも」

キース「わかった、わかった、お得意の物理学の講釈はもういいから、早いところ安全な場所に」

ホーキング「博士！私の専門は宇宙考古学です。ですから考古学で有名なキース博士の南極調査団の募集に応募したんじゃないですか！南極大陸は人類に残された最後の未開の地！そして地球発生の謎が秘められているであろう魅惑のユートピアなのです！」

キース「ハークシヨン！君、そのコート、もうひとつないか？」

海から上がってくるアバズレとセイレーン。

アバズレ「ゲホッ、ゲホッ……」

キース「おー！アバズレさん、久しぶりだね！会いたかったよ！」

セイレーン「またこいつ？あなたも懲りないわね」

アバズレ「あはは……だけど彼が大事な話があるからって」

セイレーン「大事な話？」

キース「どうかしたのかい？（誰かいるのか見るが見えない）」

アバズレ「どうかしたじやないわ！まったく、いきなり現れるから氷が割れて海に落ちちゃったじやないのよ！それにだいたいね、遅い！レディーを待たせるなんて言語道断よ」

キース「待たせてしまったのか、それは申し訳なかった。なんせ始めて自分で操船して来たものだから。初めての航海、ぬふふふ」

アバズレ「自分で操船？ふん、言い訳はいいわ！それにしても何よ、もう！3年ぶりに会いたいつていうから海底の城からわざわざ出て来てやったつて言うのに、なんでわざわざこんなクソ寒い南極なんかで待ち合わせしなきゃいけないの！？まったく相変わらず頭がいいんだか馬鹿なんだか……それで、何？……よりを戻したいつて言うなら……話を聞いてあげないでもないわよ」

キース「いや、そんな話じゃないんだが、君しか頼る人がいなくて」

アバズレ「違うの！？」

セイレーン「恥ず」

アバズレ「ふん、帰る！何よ、人がせっかく……言つときますけど、私は別に期待なんかしてないから！最後の日に、あまりにボロボロにやつつけちゃったから、ちよつと気になって顔を見に来ただけよ。ふん、あんたのことなんか、私はきれいさっぱり……きれいさっぱり忘れて……きれいさっぱり……このやろう！もう一度ギッターギッターに！」

キース「アバズレさん！（抱き寄せる）」

アバズレ「……ちよつと何よ……離して……今さら何を言つたつて」

キース「許してくれ、アバズレさん……私は本当はあなたとお別れなんかしたくなかつたんだ！だが、私には考古学という追求しなければならぬ仕事がある。仕事と恋の狭間に苦しんだ私はあの時、身を切る思いで君に別れを告げたんだ……でも！3年経つて気が付いた！私にはやっぱり君が必要なんだつて……アバズレさん、私を許してくれ、そしてもう一度、私にチャンスを与えないか！？」

アバズレ「キース……」

セイレーン「そんなキザな言葉に騙されてどうするの！？」

アバズレ「……うー……嘘つけ！だったらこんな所に来なくなつていいだろうが！？どうせまたお室の情報でも手に入れたんで私を利用しようつてんでしょ？違う！？」

セイレーン「そうよ、その調子！」

キース「するどい……いや、それは誤解だよ」

ホーキング「だけど博士、たしか出発前に、私と君じゃ頭脳は抜群だが腕っぷしがからきしだ。誰か暴力にたけた者は……そうだ！海賊亡霊三銃士のアバズレだ！つて言つてましたよね？」

アバズレ「あん！？」

キース「うーそうそうそーそんなこと言うわけないだろう！？黙つてろ、馬鹿もん！あはははは、

まあそのお宝の情報っていうのはその通りなんだが、だけど聞いておくれ！私はね、アバズレさん、君と二人でそのお宝を手にすることが出来たら最高だなんて、本当にそう思って、わざわざここまで君に来てもらったんだ。信じておくれ」

アバズレ「・・・本当に？・・・嘘じゃなくて？・・・まあ、私もこのまま海の底で朽ち果ててくなんて嫌だったから・・・信じていいの？」

セイレーン「だめよ！だめだめ！信じちゃダメー！」

キース「いい、いい、信じて信じて信じたおしてくれ！」

アバズレ「わかったわ！私、信じる！」

セイレーン「馬鹿！」

キース「それじゃあ」

アバズレ「許してあげるー、もう寂しかったあ！キース博士！」

キース「アバズレさん！」

アバズレ「キヤー！やだやだ、キースったら！（バシッと叩く）」

キース「いたたた・・・」

アバズレ「でも・・・アバズレって呼んで。さんはい・ら・な・い！」

キース「おう、そうだったね！ジュテームアバズレ！アモーレ、ア・バ・ズ・レ！」

二人をスリッパでたたくセイレーン。人間には見えない。

アバズレ・キース「痛たー！・・・」

セイレーン「ふう！よりによって人間の男が原因で城を飛び出すなんて・・・ずるい！もう知らない！」

海に帰ってしまうセイレーン。

アバズレ「あ、セイレーン！」

キース「あー痛た・・・何か言った？なんだったんだ？カモメでも襲撃してきたのか？」

カモメの声が聞こえてくる。

マリネ「アー、アー（カモメ通信）」

キース「やっぱりカモメだ」

ホーキング「違います！博士、船です！」

ホエール号が到着し、カモメ信号を響かせながら上陸してくるマリネ。

スカイ、アボカド、ダンスも降りて来る。

銃を構えるキース。キースの後ろに隠れるホーキング

スカイ「中年カップルが何やってんだよ」

アバズレ「なに！？見てたの？」

マリネ「あまりアツアツだと氷が融けちゃいますよ」

アボカド「そうそう、これ以上温暖化を進めないでね」

キース「貴様たち……」

ダンス「それにしても寒いわね……スカートはいて来るんじゃないわ、スースーしてまいたちやうわね」

キース「こんな所で何をしている？」

スカイ「それはこっちのセリフだ。おい、いつまでそんなもの構えてるんだ？俺たちには勝てないってまだ分からないのか？」

キース「うるさい！これでも喰らえ！」

寒さで凍って弾が出ないキースの銃。

キース「あら？……くそ、この、ちくしょう！」

スカイ「凍っちまうに決まってるんだろ？南極だぞ？」

キース「うぬぬぬ……うりゃー！（殴りかかるキース）」

スカイにたどり着く前にアボカドのお玉でやられるキース。

キース「うぐぐ……（倒れる）」

【転換】ペンギンダンス

※キース達を縛るスカイたち。

目が覚めると縛られているキースとホーキング。

キース「……うん（目が覚める）、わ！こら、縄を解け！卑怯だぞ！」

スカイ「何が卑怯だ、卑怯の王様が」

マリネ「あははは、上手いこと言いますね。ところで、別れたんじゃないんですか？お二人は」

アバズレ「それがね、聞いてよマリネ」

マリネ「はいはい」

アボカド「そんなことよりお腹すいた」

アバズレ「あのね、キースがね」

ダンス「こう寒くちややってられないわね、火を熾して何か食べましょ」

アバズレ「だから、私の事が忘れられなかったみたいで」

スカイ「なにか薪になるものあるかな？」

アバズレ「ねえ、キース、あなたからも」

マリネ「そういえば、ナワバリとテキーラの二人はどうしたんですか？」

キース「ああ、やつらはコソ泥でつかまって塀の中だ」

アバズレ「あのね、今日ここで待ち合わせて」

マリネ「へー、私たちも前つかまりましたね」

アボカド「そうだったそうだった！そこでみんな、再会したんだよね」

スカイ「そうそう！そんなもって、魔女の仕業で」

マリネ「脱獄成功！」

アバズレ「ギョツてされて、それでキュンとしちゃって」

アボカド「だけどそのおかげでいらは火炙りにされそうになったのさ！きー！」

マリネ「まだ根に持ちますか？」

アバズレ「ぬぬぬ・・・もうみんな、聞けー！」

みんな「・・・」

アバズレ「聞け聞け聞け！なにが魔女だ！？何が脱獄だ！？あたしの恋バナ聞けよ・・・はあはあ・・・分かったか！？」

みんな「はい」

【転換】ペンギンダンス2

※火を熾して暖を取るスカイたち。

スカイ「じゃあお前も、南極の氷壁に眠る王家の財宝を探しに来たってわけ？」

キース「ああ、そうだ。黄金の島ジ・パングを出た後の戦いで、お前らの船ホエル号も我々の船シャーク号も、爆弾で木っ端微塵になった。海に投げだされた私は、流れてきた折れたマストに必死にしがみついて命を繋いだ。しばらくすると目の前に見覚えがある手帳が流れてきた。ギラギラの手帳だ。私はそいつを手に入れ、氷壁の王冠の情報を知ったというわけだ。すぐにでも出航したかったが、新しい船を手に入れるまで3年もかかってしまった」

マリネ「私たちも海に落ちた時、てんでバラバラになりましたね。それぞれが違う島、違う土地に流れ着いたのですが、なんとかこの4人はまためぐり合うことができました。こちらも3年かかりました」

アバズレ「4人？ギラギラとバンジーはどうしたの？」

アボカド「ギラギラは鯨に食われちゃったんだ。船が爆発する前から、シムクザメに狙われてたからね」

マリネ「シムクザメってあれですよ、ハンマーヘッドシャーク！凶暴なくせに、こーんな形で、目がこーんなところについて、前見えてるのかー？って聞きたくなるような面白い顔の鯨です」

スカイ「そうそう、なんのためにあんな形なんだろうな？」

アボカド「隣の席があいっだったら気になってしょうがないね」

マリネ「たしかに！ずっと見てるなーって気になって気になって」

スカイ・マリネ・アボカド「(大笑い)」

アバズレ「くだらない話はいい！」

スカイ・マリネ・アボカド「はい！」

アバズレ「それで、バンジーは？」

スカイ「・・・それがよ、いねえんだ」

キース「いない？それは愉快だな」

アボカド「なんだと！？」

マリネ「まあまあ」

ダンス「この3年の間、それぞれが何とか生き延びてはきたけれど、バンジーは現れなかった・・・」
スカイ「あいつのことだから、あの程度の事でまさか死んじやいねえとは思うが・・・3年もありや、そろそろ裏の世界に、噂だけでも聞こえてきて良さそうなんだろう？」

アバズレ「そうね。あんなうるさい男だもの、何かあれば噂になるわよね」

ダンス「ところが何も音沙汰がなかった。だからこっちから動くことにしたの」

アバズレ「動く？」

ダンス「そう。残った4人で、ギラギラの手帳にあった、南極大陸に隠された王家の財宝を探しに行くことにしたの。もしかしたらバンジーはすでに行ってるかもしれない。いいえ、彼の事よ、あんなすごいお宝の話を聞いて行かないはずがないって」

マリネ「痕跡だけでも見つかるんじゃないかと思ってますね」

スカイ「まあ、見つからなかったときは諦めて、お宝を頂戴すればいいかと思ってよ」

アボカド「良く言うよ！あいつは生きてる！生きてるはずだー！って大泣きしたのはどこの誰でしたっけー！？」

スカイ「馬鹿、止める！このやろう！」

アボカド「いてて！」

スカイ「あははは、うそだよ、うそ」

アボカド「けどお腹すいたなあ」

マリネ「またですか？」

スカイ「魚でも釣れないかな、ほら、この辺に穴開けてよ」

ホーキング「釣竿なら持ってきてますよ」

アボカド「本当？貸して貸して！ってあなたは誰なの？」

ホーキング「私は今回のキース博士の南極調査団主任研究員、ホーキングと申します」

みんな「南極調査団？」

ホーキング「はい、博士と私の二人だけですけど」

ダンス「でも、主任研究員なんてすごいじゃない。よろしくね、ガリ勉君」

ホーキング「ガリ勉はいけませんか？」

マリネ「われわれは勉強とは縁がありませんからねえ。ひがみですよ、ひがみ」

ダンス「嫌ね、尊敬のつもりで言ってるのよ。それで、南極って魚いるの？知ってる？」

ホーキング「はい、キスやコチャ、変わったのだとオセレイテッドアイスフィッシュなんていう変わった魚もいますよ」

アボカド「でもさ、どうして南極の魚は凍らないの？海も凍っちゃうくらい冷たいのにさ」

ダンス「はい、大先生、教えて」

ホーキング「いい質問ですね！南極の海水はマイナス3度、普通の魚はマイナス0.8度で凍ってしまいますが、南極の魚たちは体の中に不凍タンパク質というものを持っているんです」

アボカド「へー、それで凍らないんだ。すごいなあ」

スカイ「お前、ここに詳しいのか？」

ホーキング「はい、宇宙考古学で南極について研究しています」

スカイ「ふーん・・・よし、こいつの縄をほどけ」

アボカド「え、いいの？」

スカイ「ああ、こいつは上手く使えば便利そうだ。連れて行こう」

キース「連れてくって、おい！私の部下だぞ！それに、わ、私はどうするつもりだ！？」

ダンス「置いてくに決まってんじゃない、仲間でも何でもないんだから」

スカイ「さてと、それじゃあ魚を釣るか」

キース「待て待て待て！良く考えてみる！」

ダンス「何をよ」

キース「ここは休戦と行こうじゃないか。お互いの情報と知恵を持ち寄り寄らなければ、おそろく」

マリネ「おそろく？」

キース「この氷と極寒の場所では、誰一人」

アボカド「誰一人？」

キース「命が無いだろう・・・」

マリネ・アボカド「ひー！」

スカイ「単純か！？あいかわらず騙されやすい奴らだなあ」

アバズレ「でも確かに・・・来たはいいけど、あなたたち人間にはずいぶん過酷な場所よね。亡霊の私以外、ここから生きて帰れる保証はない。あ、私死んでるんだった、キャハ！」

マリネ「んちゃー！」

アボカド「くびぶー！」

スカイ「ペンギン村か！まじめにやれ」

ダンス「それで、今分かっていることをまとめると？」

ダンスに縄を解かれたホーキング。

ギラギラの手帳を取り出す。

ホーキング「(咳払い)これによるとですね」

マリネ「おう、ギラギラの！（手を合わせて拝む 何か言ってる）」

スカイ「成仏しろよー(手を合わせて拝む)」

アボカド「アーメン、ソーメン、ヒヤソーメン(手を合わせて拝む)」

ダンス「(ホーキングから手帳を奪い)氷河の王冠・・・かつて南極大陸に君臨した王家の王女が殺され、悲しんだ王はいつの日か王女が蘇ることを祈りつつ、南極の氷河の壁に王女を埋葬し

た。王女と共に氷壁に閉じ込められた膨大な宝物と王家の証である王冠は今もそこに眠っている・・・本当にあるのかしら？」

スカイ「南極大陸に君臨した王家か・・・南極大陸って実際、ペンギンくらいしか住めないと思っただけだな」

キース「ところがそうでもないらしい」

マリネ「何か知っているのですね？」

キース「ああ。だがこのままでは教えるわけにはいかない」

アボカドに目配せするスカイ。

包丁でキースの縄を切るアボカド。

キース「(腕をさすりながら)もちろん地上はブリザードが吹き荒れ、ひどい時はマイナス60度にもなるので人間が暮らすことは難しい」

ダンス「じゃあどこにあったの？その王家っていうのは」

キース「私の勘が正しければ・・・あの氷河の下、氷壁に囲まれた巨大空間だ」

◆その3

氷河の空間。

髭の男(バンジー)がまた氷壁を掘っている。

そばには、男について回る不思議な人形・コアが立っている。

バンジー「・・・おい・・・あっちいけ」

コア「・・・」

バンジー「ふん・・・おい・・・たく・・・」

コア「・・・」

バンジー「おい、てめー！いい加減にしろ！俺になんか用か！？朝からずっと俺の周りをちよろちよろしやがって！うっとおしくてしょうがねえ！」

コア「・・・うっとおしい？どういう意味ですか？」

バンジー「なんだお前、しゃべれるんじゃねえか！」

コア「うっとおしい・・・うっとおしい・・・」

バンジー「あー、だからな、うっとおしいというのは、そうだな、あ！例えば、やっと寝れたのに耳元でぶんぶんいう虫とかいるだろ？うとうとーとするとブーンってくるあれ！それからあとはな、そうだ、背中がかゆくてしょうがなくてよ、長い棒でこう、カリカリとかくんだけど、どこをかいてもそこだ！つてとこが見つかんない時とかあるだろ！？・・・そういう感じだ？わかったか？」

コア「全然わかりません」

バンジー「(ずっこける)・・・最高に分かりやすいと思うけどな・・・だけど、どうして俺にまとわりつくんだ？」

コア「まとわりついてなどいません。守っているんです」

バンジー「守ってる？いったい何をだ？」

コア「それは言えません」

バンジー「どうして言えないんだよ」

コア「そういう風に作られているからです」

バンジー「作られている？誰に作られたんだ？」

コア「言えません」

バンジー「ふーん、まあいいけどよ、俺の邪魔だけはするなよな？いいか？」

コア「お願いがあります」

バンジー「お願い？いったいなんだよ」

コア「この場所を掘るのをやめてください」

バンジー「掘るのをやめる？どうして？」

コア「言えません」

バンジー「まーたそれか・・・あのよ、人にものを頼むのに、理由も言えないんじゃないか？こっちは決めようがねえだろ？」

コア「ごめんなさい」

バンジー「・・・別に謝らなくてもいいけどよ・・・つまり、あれだ、お前にもなんか事情があるんだな？この場所を掘られたくない事情が」

コア「はい、そのとおりです」

バンジー「・・・しようがねえな・・・じゃあ、あと5回だけ掘らせろ。そうしたら別の場所へ移動してやる。それでどうだ？」

コア「5回・・・ですか」

バンジー「ああ、5回だ。きつちり5回。それ以上は絶対掘らない。約束する」

コア「・・・わかりました。ではあなたが5回だけ掘るのを待ちます」

バンジー「よし。じゃあやるか。いくぞ」

コア「はい」

バンジー「せーの」

バンジー・コア「1 (掘る カキーン！)」

バンジー「くそ、次だ！」

バンジー・コア「2 (掘る カキーン！)」

バンジー「はは・・・俺は後半に強いんだ」

バンジー・コア「3 (掘る カキーン！)」

バンジー「まだまだ！」

バンジー・コア「4 (掘る カキーン！)」

バンジー「次で最後か・・・こうなりややくそだ！」

バンジー・コア「5 (掘る カキーン！)」

諦めかけた最後の1撃で、突然氷が裂け、まばゆい光があふれる。

と同時に、氷の中から宝剣を掘りあてる。

バンジー「おお、すげえ！なんか出てきた！……今までの小物とは比べ物になんねえ、剣だ、こりや宝剣だ！ってことは、王冠も近くに！……ん？やばい！うわー！！あぶねえ！坊主、逃げろ！うわー！」

衝撃で氷壁の一部が崩れる。

すると氷の中から少女が出て来る。

バンジー「……ふー、助かったのかな？いてて、おい、大丈夫か？」

コスモ「……」

バンジー「……わーお！氷の中から誰か出てきた！……誰だ？お前……どっから出てきたんだ？」

コスモ「……ここはどこ？……あなた……誰？」

バンジー「俺？……俺は……あれ？俺誰だっけ？……長い事一人で氷の壁ばつか掘ってたから忘れちゃった、あははは……なんで俺、氷掘ってたんだ？」

コア「王女！コスモ王女！」

コスモ「まあ、コア！コアじゃないの！？もつとこつちへ来て。ああコアね、本当にコアね……なんだかとても久しぶりな気がするわ」

コア「王女……ありがとうございます。あの……髭の人」

バンジー「それはやだなー、髭中心に人を判断しないで欲しいなあ……だけど、ありがとうございます……俺、なにかしたか？」

コア「あなたが今、王女の宝剣を掘り当てたおかげで封印が解け、王女は氷の中から出て来るこ
とが出来たのです」

バンジー「これ？……これのおかげで出てこれたって？」

コア「王女のお物です。お返しください」

バンジー「え？返せって？……よくわかんない話だけど、ま、いいか、ほらよ」

コア「(受け取り)ありがとうございます」

バンジー「あー、思い出した！俺の名前はバンジー！俺様は海賊バンジーだった！あははは、あー良かった良かった、危うく本当に忘れるところだったぜ！そうだ、俺は南極大陸の氷の壁の中に隠された王家の財宝を探しに来たんだって！と、いうことは……あ、それ、さっきのそれ返せ！」

取り返そうとコアに飛びかかるが返り討ちにあうバンジー。

バンジー「あたっー！！……くー、お前、強ええな！」

コア「大丈夫ですか？」

バンジー「なんでもねえよ、このくらい……いててて」

コスモ「クスツ、面白い人ね」

バンジー「そうか？別に俺本人は面白くもなんともないけど、お前の方こそ何もんだよ？」

コスモ「申し遅れました。私はグレイシャー王国の王女、コスモです」

バンジー「王女？へー、すげえじゃん！コスモか、いい名前だな。俺もホエール族っていうチンケな海賊一族の末裔なんだけどき、一族は滅んじまった。俺が最後。まあ、しょうがねえよな、海賊なんて流行らねえからな」

コスモ「私の王家は・・・私のグレイシャー家は・・・」

頭を押さえて倒れこむコスモ。

バンジー「どうした？おい、大丈夫か？頭が痛えのか？」

コア「王女、しつかり！」

人の気配が近づいてくる。

バンジー「誰か来たな。またきつとあいつらだ、悪いが俺は行くぜ、じゃあな！」

コア「バンジーさん！」

バンジー「なんだよ？早くしろよ、奴らが来る」

コア「お願いです、一緒に逃げていいですか？」

バンジー「一緒に逃げるって・・・どうして？」

コア「おそらく私たちも、あなたと同じく彼らから逃げることにあります。だけど私一人では王女を守りきれないかもしれない・・・頼みます、バンジーさん！お願いします！」

バンジー「・・・あー、もううつとおしいなあー！！んー・・・行くぞ！早く来い！」

コア「はい！」

コスモに手を貸して逃げていくバンジーとコア。

そこにノマドたちが現れる。

ノマド「また氷壁を掘った跡だ」

ウイング「ちくしよう、あいつ自分が何をしてるのか分かってるのか！？」

ノマド「落ち着け、ウイング！必ず捕えてみせる」

ウイング「だけどノマド、もう3年だぞ！3年も逃げられっぱなしで」

オルカ「ねえ、見て！・・・これ（王女が出来てきた氷壁の穴）」

ステラ「どうしたの、オルカ？・・・これは！？・・・コスモが復活した？」

オルカ「・・・もしかしたら、すでに王冠も掘り出されたのかしら」

ウイング「いや、そんなはずはない。王冠を手にしたなら、逃げる必要はないからな・・・」

ステラ「だけどコスモは氷壁から解き放たれた・・・どうしよう・・・」

オルカ「だめよ、ステラ！私たちが動揺すればそれだけ祈りの鎖が弱まる。そうなれば、コスモは記憶を甦らせてしまうわ」

ノマド「オルカの言うとおりで。王冠はまだ見つかってはいないはずだ。いま一度、祈りの鎖を強く結び、コスモの記憶を封じ込めよう！さあ！」

ウイング「よし！やろう！」

氷の洞窟。

バンジー「ここまで来ればひとまず大丈夫だろう」

コア「王女、大丈夫ですか？」

コスモ「ええ、だいぶ楽になったわ・・・少し眠りたい」

バンジー「そうしな。このあといつ眠れるか分からなそうだからな。お前も寝とけ」

コア「いえ、私は平気です」

バンジー「やせ我慢するな、俺が見張ってるから安心しろ」

コア「いいえ、本当に。私は神の人形なので大丈夫なんです」

バンジー「神の人形？なんだよ、それ？」

コア「神の人形なので、眠くなったりはしません。お腹もすきません」

バンジー「眠くならないって、3日も4日も寝ないでいられやしないだろう？さすがの俺だって2日が限度だぜ。いったい何日寝てないんだよ？」

コア「500年です」

バンジー「ほらな、いくらなんだって・・・500年？」

コア「はい。私は、500年前にある目的のためにこの世界に置かれた人形です」

バンジー「人形？生きてないってことか？」

コア「はい」

バンジー「うそだー、だってしゃべってるし、やわらかいし、全然人形なんかには見えなけれど・・・」

バンジーの手を取り、自分の胸に当てるコア。

コア「鼓動がないでしょ？それにほら、耳をあてて聞いてみてください」

コアの胸におそるおそる耳をつけるバンジー。

バンジー「・・・カチコチカチコチ・・・時計みたいな音がしてるぞ」

コア「これで信じてくれますか？」

バンジー「ロボットってことか？」

コア「ロボット？・・・その言葉は知りませんが、私は500年間、動き続けています」
バンジー「なんか急にいろいろ教えてくれるんだな」

コア「あなたは王女を助けてくれました。仲間と認めます。もう立派な家来の一員です」

バンジー「なるか！？俺は誰の上にも下にもなりたくねえの。それで、いったい何のために50

0年も？」

コア「王女を守るためです」

バンジー「王女を守る？」

コア「私は王女が生まれた時から、王女にお仕えています」

バンジー「おいおい、それじゃつまり、王女も500年前の過去から蘇ったってことか？氷の中で眠り続けて」

コア「そうです」

バンジー「あれ？だけどたしか、王女は殺されて氷の壁に埋められたって聞いたけどな。死んじまったんじゃないのかよ？」

コア「・・・死んだのではなく、封じ込まれたのです。神々の手によって」

バンジー「封じ込まれた？」

コア「・・・王女の胸をつらぬいたのはこの剣です」

バンジー「あ！俺の！」

またも簡単にふっ飛ばされるバンジー。

バンジー「冗談だよ、本気でぶっ飛ばしやがって、いたたたた・・・」

コア「すみません、加減が下手なもので・・・」

バンジー「覚えたほうがいいよ、怪我しちゃう。それで」

コア「はい・・・この宝剣は、太古の昔からこの南極大陸を守ってきた神々の剣です。地、海、風、星を司る4人の神々です」

バンジー「俺を追っかけてる奴らか？なるほどな、封じ込めた王女を俺が掘りだしちゃうんじゃないかと焦って俺の邪魔をしてたわけか。でもなんで？どうして神々は、王女を封印したがつたんだ？」

コア「したかったのではなく、そうするしかなかったんです」

バンジー「どうして？」

コア「神は人間を殺せません」

バンジー「そうなの？」

コア「(うなずき) 王女コスモは、人間でありながら、宇宙を司る5人目の神でもあるんです」

バンジー「5人目の神？」

コア「王女の生命がこの世に誕生した瞬間、宇宙神コスモは彼女の体に移りました。神々は体を持っていません。人間の世界に直接関わるためには、人間の体が必要なのです。それを手に入れた神コスモを、そうではない神々は恐れた」

バンジー「だから氷の壁に封じ込めたと」

コア「はい。人間である王女を殺せないかわりに、王女の中の神に祈りの鎖をかけた・・・」

バンジー「あちゃー、それじゃ俺は封じ込められてた神様を復活させちゃったわけ？なんかバチあたりそう、やだなー」

コア「王女は王より王冠を授かり、グレイシャー王国の女王になるはずでした。王冠が見つけれ

ば、王女は正式に女王として王国を再建できます。しかし王冠も長い年月の中で、どこかに消えてしまいました」

バンジー「ふーん・・・あのよ」

コア「なんですか？」

バンジー「またさっきの王女が出てきた壁のあたりを掘ってみたら、王冠は見つかるかな？」

コア「いいえ。氷河は動いているんです、長い年月をかけてゆっくりと。もうあの辺りには王冠は無いでしょう」

バンジー「そっかー、だけどこの3年で、あらかた掘りつくしたんだよなあ。あとどこかめぼしい所知ってるか？」

コア「おそらく」

バンジー「お？なにになに？知ってるの？おそらくどこだよ？」

コア「マウント・ビンソンの真下にある第8番目の海、地底海」

バンジー「第8番目の海？」

◆その4

氷河の空間。

財宝とバンジーを探すため進むスカイたち。

興奮して駆け込んでくるキース。

キース「見てみる！私の思った通りだ！やはり、氷河の下には地上とは違う別世界が広がっていたんだ！わはははは、探すぞ！そして必ずや王家の埋蔵品を見つけ出してやる！わはははは！」

ホーキング「博士」

キース「なんだ、ホーキング君？心配するな、私に任せておけば間違いは」

ホーキング「やめさせていただきます」

キース「・・・何をだ？」

ホーキング「キース南極調査団の主任研究員をです」

キース「・・・どういう意味だ？」

ホーキング「私は純粋な学術的探究心でこの調査に参加したのです。まさか博士がお宝目当てだったなんて知りませんでした。ですから今この時をもって、辞任させていただきます。この後は私個人として研究を進めさせていただきますのでご承知ください。以上です」

キース「あ、おい・・・ホーキング君」

アバズレ「あーあ、せつかく見つけた優秀な部下にも見放されて本当に情けない男」

マリネ「でも好きなんですよね？」

アバズレ「そうねえ、わたしってダメ男に惚れちゃう相があるのよねえ・・・あ、これ見て、この恋愛線、ここがグニユってなってるでしょ？これがね、それでね・・・（マリネに手相を見せてぶつぶつ言う）」

ダンス「でも綺麗ねえ・・・全部ダイヤだったらいいのに。もしそうならどのくらいになるのかしら？100万バロン？ううん、1億バロンでも足りないわ、あー、わかんない、わかんない！そんなにあっても使い切れない！どうしよう、ねえ、スカイ、どうしたらいい!？」

スカイ「どうもこうも全部が全部、ただの氷だろうが。馬鹿じゃねえのか？」

ダンス「馬鹿とは何よこのエセイケメン！あんた自分じやイケてるつもりでしょうけど、言っといてあげる、微妙だから、ところどころ」

スカイ「なんだと！お前の方こそ、このインチキセクシーデカ女！」

ダンス「なんですってー！！」

スカイ「はん、凶星で怒ったかー？インチキセクシー！インチキセクシー！ほら、お前もやれ、インチキセクシー、インチキセクシー！」

アボカド「えー？おいらも？しようがないなあ・・・インチキセクシー、インチキセクシー」

ダンス「スカイ、今日こそは許さないわよ、アボカド、お前もよ！死んで詫びな！」

銃を乱射するダンス。

弾が氷の壁を跳ね返り、氷が崩れてくる。

悲鳴を上げる面々。

スカイ「ひえー、馬鹿野郎！こんな所で銃をぶつ放す奴があるか！？」

マリネ「そうですね、ダンスさん！氷の空間なんですから、慎重に、慎重に」

アボカド「怖かったあ」

アバズレ「どっちが？氷？それとも」

アボカド「（ダンスを指さす）」

スカイ「（破片を拾い）見てみる、ただの氷だ。1バロンの値打ちだってありやしねえよ」

ホーキング「そんなことはありませんよ」

アボカド「どうして？」

ホーキング「いいですか？この南極の氷河の氷はただの氷じゃありません」

スカイ「ただの氷じゃない？」

ホーキング「ええ。この氷は太古の情報を含んでいるんです」

マリネ「太古の情報？太鼓の情報ではないですよ？タンタカタカタンタカタカタン」

スカイ「し！」

ホーキング「南極の氷の中には、地球創生時代に宇宙から運ばれてきた未知のものが封じ込められている、と私は考えています」

ダンス「地球創生時代？」

ホーキング「はい。御存じのように地球は宇宙空間に漂っていたチリやゴミが集まり次第に冷えて固まって出来たわけです。最初はドロドロだったものが外側から固まり、地表となり、中心は今でも熱く融けたまま」

アボカド「えー！そうなの！？それじゃまるでプレンオムレットみたいだね！最初はドロドログチャグチャな液状なのに、火が通れば通るほど甘いにおいが辺りを包み込み、どんどん丸められながら集められ形作られ、外側が固まれば完成さ。大事なのは中がトロツと半熟な事だよ。ソースはケチャップはもちろん、ホワイトソースやマッシュルームソースもおすすすめ。一口口に運べば、玉子以外ではありえない濃厚な口どけと甘味、そして命の始まりが奏でる過去と未来を繋ぐタイムトンネルの様な永遠の喜びに誰もが身を震わせること間違いないのさ」

一同「（拍手）」

マリネ「なんだかコメント力、上がってますね」

ダンス「それで？そうだとどうなるの？ガリ勉君」

ホーキング「つまり、何十億年も前に氷河によって削り取られた地球の表面は、この壁や天井、床、あらゆる場所に溶け込んでいます」

スカイ「いったい、どんなもんが？」

ホーキング「例えば、いいですか？あなたの使ってるその剣」

スカイ「これか？」

ホーキング「その材料である鉄だって、元々は宇宙にあった元素です」

マリネ「ふむふむ」

ホーキング「他にもたくさんありますが、その中には宇宙からやってきた細菌やウイルスなども含んでいると私は考えています。つまり人類史上には顔を出していない、眠れる微生物たちです」

アボカド「それっておいらたちを病気にしちゃうやつらのこと？」

ホーキング「微生物は悪者ばかりじゃありません。もしかしたら逆に、人類にとって画期的で有益な発見をもたらすものもあるはずですよ。それはこれからの研究にかかっていますよ」

スカイ「それじゃあこうしちゃういらねえな。二手に分かれて調べようぜ」

ホーキング「わかりました。博士行きましょう」

キース「え？いいのか？私が一緒で・・・」

アボカド「メチャクチャいじけちゃってるね」

マリネ「いいんですか？行かせちゃって」

スカイ「どっちみち手は無いんだ。学者チームにも張り切ってもらおうぜ」

マリネ「なるほど、そういう事なら、はいはい、頑張ってくださいよ、天下のキース博士ですよ
ね？」

スカイ「そうそう、天才考古学者キースさん、よろしく頼みます」

キース「天下のキース博士、天才考古学者・・・よし、わかった！私はあっちの方を調べてみる。

また後程ここで落ち合おう、グッドラック！ほら、行くぞホーキング君」

アバズレ「単純ねー。行ってくるわ」

ホーキング「では」

別の場所に調査へ向かうキース達。

ダンス「ねえ、さっきの話だけど、もしかしたら、めちゃくちゃお金になるんじゃない？」

スカイ「何が？」

ダンス「だから、未知の微生物から新しい薬が発明されるのよ。その微生物を発見するのが私たち。王冠も欲しいけどやっぱ一番は不労所得じゃない？働かなくても、それこそ教えきれないくらいのお金がわんさかわんさか！ああ、1億バロン？ううん、1000億バロンだって夢じゃないわよ！やったー！ついに大金持ちよ！あはははは！私、あっちのチームに行く！なんだっからガリ勉君と結婚しちゃう！まって、ガリ勉君！」

スカイ「馬鹿馬鹿、待て！」

ダンス「(アドリブで抵抗する)」

マリネ「くだらない妄想で衝動的な行動は止めてください！」

アボカド「第一、彼がダンスと結婚するわけじゃないじゃん！」

ダンス「どうしてよ！？」

スカイ・マリネ・アボカド「インキセクシーだから」

ダンス「お前らなー！」

その時突然、ノマド達が現れる。

囲まれるスカイたち。

スカイ「なんだ、お前ら!？」

マリネ「人がいましたね」

スカイ「なんか用か!？」

ダンス「だいぶ怒ってるみたいね、あんた何かやって笑わせないさいよ」

マリネ「無理ですよ、この状況では・・・あ、アボカド!（アボカドの背中を押す）」

アボカド「（前に出る）あ、あのね、おいらア、ア、アボアボ、アボカド、料理が得意なので、一緒にご飯でも」

ノマドが剣でアボカドを斬りにかかる。

スカイ・マリネ・アボカド「アボカド!」

驚いてしりもちをつくアボカド。

ノマド「氷壁に手を出すな」

スカイ「なんだと!？」

ウイング「氷壁に手を出せばどうなるか分かっているのか!？」

マリネ「知りません・・・」

オルカ「氷壁は世界を守っている。氷が融ければ世界は滅亡よ!」

スカイ「氷壁が融ける!？」

ダンス「世界が滅亡って、そんな馬鹿な・・・」

ステラ「私たちは氷壁を守らなければいけない」

ノマド「そのために、お前たちの体が必要だ」

オルカ「私たちは南極の守護神」

ノマド「地の神ノマド」

オルカ「海の神オルカ」

ウイング「風の神ウイング」

ステラ「星の神ステラ」

M 「祈りの鎖」 ビックヴァージョン

◆その5

氷の空間。

髭を剃るバンジー。

そこにコスモが近づいてくる。

バンジー「お、目が覚めたか?頭の具合はどうだ?」

コスモ「ええ、もう大丈夫」

バンジー「しっかしびっくりしたぜ、いきなり氷の中から飛び出して来るんだからよ。俺はつきり氷の魔神でも現れたかと思っただよ」

コスモ「私、氷の中にいたの?」

バンジー「・・・覚えてねえのかよ」

コスモ「(うなづく)」

バンジー「ま、そのうち思い出すんじゃないやねえの？忘れちゃうくらいの事なんて、どうせたいしたことじゃねえよ」

コスモ「(微笑み)・・・何をしているの？」

バンジー「ああ、これか？髭を剃ってるんだよ。見たことあるだろ？」

コスモ「いいえ、王家の男性は髭を伸ばしたままだから。だからてっきりあなたも王族かと思つて」

バンジー「俺が？王族？あはははは！俺は族は族でも王族と真反対の海賊だよ」

コスモ「海賊？聞いたことがあるわ。海の上で暮らしながら、船を襲ったり島で略奪したりする大悪党だつて」

バンジー「大悪党ね、まつ、確かにその通りだな。俺たち海賊は行きたいところに行き、欲しいものは力づくで手に入れ、寝たい時に寝て、食べたい時に食べる」

コスモ「・・・罪悪感とかは無いの？」

バンジー「あるよ」

コスモ「じゃあ」

バンジー「あるけど、そうやって生きる生き方しか知らないからな。爺さんの爺さんのそのまた爺さんの頃から俺たちはそうやって生きてきた」

コスモ「・・・」

バンジー「といつても、俺たちホエール族は殺しはやらないし、貧乏人や困ってる奴から奪つたりはしない。そういう掟なんだ」

コスモ「掟・・・」

バンジー「そう。お前の国にもあるだろう？掟」

コスモ「・・・あるわ」

バンジー「どんな掟だよ？」

コスモ「・・・氷壁を守らなければならない」

バンジー「へー」

コア「バンジー、食べ物です」

コアが食料を持って帰ってくる。

バンジー「お、気が利くな。ちようど腹ごしらえしたかったんだ。何があった？」

コア「はい、これ。ペンギンの卵」

バンジー「そっか、今は繁殖期か。でかしたぜ、コア(穴をあけて飲み始める)」

コア「さ、王女も」

コスモ「今はいいわ」

コア「でも何か食べないと」

コスモ「食べたくない。それより教えて、コア。私はいったいどうしちゃったの？氷の中にいたって本当なの？お父様は？王家はどこなの？みんないったいどこに行ったの？思い出せない・・・ねえ、教えて！本当は何があったの！？」

バンジー「落ち着きな、王女様」

コスモ「でも・・・」

バンジー「なんて言ったらいいのかな・・・」

コア「私が話します」

バンジー「・・・そうだな」

コア「王女・・・あなたはあなたであつて、あなたではない」

コスモ「私であって、私ではない？」

コア「そうです・・・あなたの命がこの世に生まれた瞬間、宇宙を司る神・コスモがあなたの中に乗り移りました」

コスモ「宇宙の神・・・コスモ」

コア「神が乗り移った子供としてあなたは大切に育てられた。占い師によって名前もコスモと名付けられた。しかし、他の神々たちはあなたの内にいる神・コスモは国を滅ぼすといって王をそのかし、あなたを殺すように仕向けたのです」

コスモ「お父様に・・・私を・・・」

コア「グレイシャー王国はその時、王から王女コスモに王位を継承するはずでした」

プロローグシーンを再演。

コア「王女派と神々派の間では、激しい戦闘がありました。そしてついに王女を追い詰めた神々派は王に娘である王女を殺させようとなりましたが・・・王はどうしても王女を殺すことが出来なかったのです・・・神々たちは仕方なく殺すことをあきらめ、宝剣で王女の胸を刺し、神・コスモを封印しました。その姿に悲しんだ王は、王冠と共に王女を氷の中に埋葬しました。いつの日にか、蘇ることを願って」

コスモ「・・・お父様は？」

コア「・・・自害しました・・・自らの胸に剣を突き刺して・・・」

コア「そんな・・・そんな・・・」

コア「王家の血筋を失った王家は・・・滅びました」

コスモ「・・・」

コア「グレイシャー王国は滅んだんです・・・500年前に・・・」

コスモ「・・・500年前？・・・いったい何を言ってるの？私は500年間、氷の中にいたっていうの？・・・嘘よ・・・そんなの嘘よ！！」

コア「嘘ではありません！・・・しかし悲しまないでください！あなたがいれば、そして王冠さえあれば、もう一度王家を再興することが出来るのです！あなたの力があれば」

コスモ「いやよ・・・そんなこと出来ない・・・いや・・・ああ、また頭が・・・」

コア「いけない、王女、横になって！」

コスモ「さわらないで！・・・さわらないで・・・(泣)・・・頭が・・・頭が痛い・・・頭が

割れそうだわ・・・助けて・・・」

そこにスカイたちがやってくる。

スカイ「バンジー」

バンジー「誰だ！？・・・あれ？お前どこかで・・・」

マリネ「お久しぶりですね、バンジー船長。マリネですよ、マリネ」

アボカド「元気そうでした、バンジー船長」

ダンス「生きてるって信じてたわ、バンジー」

スカイ「おいおい、まさか俺のことを忘れたわけじゃないだろうな？」

バンジー「あー、そうだそうだ、確かお前・・・誰だっけ？」

スカイたち「・・・」

バンジー「・・・あれ？ずっこけない。おかしいな？うそうそ、覚えてるに決まってるんだろ？スパイだ、スパイ！な、合ってるんだろ？」

スカイ「一文字違う」

バンジー「え？うそ・・・あー、じゃあ、あ！そうか、そっちかー！ポパイだ、ポパイ！ポパイ・ザ・セーラーマーンだ！な、当りだろ？ん？」

スカイ「遠ざかってる」

バンジー「え？遠ざかってる？スパイ、ポパイ・・・あ、わかった、ポパイ？」

スカイ「スカイだ」

バンジー「あー、そうだったそうだった、スカイだ、スカイ！元気だったかー？でもなんか、みんな少し暗くなったな」

スカイの背後にノマド、マリネの背後にウイング、ダンスの背後にオルカ、アボカドの後ろにステラが立っている。

※神々に乗り移られたスカイたちは、右記の組み合わせで同時に動き、同時に話す。

マリネ「そんなことはありませんよ」

アボカド「3年も経てば少しぐらい性格も変わったかもね」

ダンス「とにかく、そこのお嬢さんを渡して」

バンジー「なんだと？」

スカイ「あなたとは戦いたくない。それでも恩を感じてるんでね」

バンジー「恩だつて？はっ、いらねえよ、そんなもん。どうやら俺が知ってるお前らじゃなさそうだな。ということは、手加減はしねえぞ！」

闘いが始まる。

徐々に劣勢になっていくバンジー。

マリネ、アボカド、ダンスに三方から一斉に刺されるバンジー。

ふらつくバンジーの胸を刺そうと剣を振り上げるスカイ。

スカイ「死ねー、バンジー!!!」

その時大きな海鳴りと共に、セイレーンが現れる。

ひるむ神々たち。

雷が落ち、時が止まるバンジーとスカイたち。

コスモを連れて消えるコア。

セイレーン「南極の神々よ、お待ちなさい。その男を殺しても何にもなりません」

ノマド「なんだと、貴様何者だ!？」

セイレーン「私はセイレーン。海の精霊として七つの海を守ることが私の使命」

ウイング「精霊だと!？精霊がなぜ人間を助ける!？」

セイレーン「神の手を人間殺しなどで汚してはいけません」

オルカ「セイレーン、久しぶりね」

セイレーン「オルカ。海の神であるあなたならわかるでしょ？海は浄化の聖域。その聖域を司るあなたが、決して浄化しえない罪を犯せば、南極の海は未来永劫、美しく光輝くことはないでしょう」

オルカ「そうだとしても！・・・例えそうだとしても、世界が減びるよりはましでしょ？」
セイレーン「世界が減びる？」

ステラ「そうよ！私たちが氷壁に封印したのは・・・宇宙の神、いいえ滅びの神、コスモなのよ！」
セイレーン「なんですって！？滅びの神コスモ！？」

ウイング「そうだ。コスモは宇宙の神、つまり天地創造、全てを司る神であると同時に、全てを無に帰すことの出来る、滅びの神でもあるんだ」

オルカ「人間たちの手によってこの地球は壊され続けてきた。海は汚れ、大気は煙り、大地は腐り、人間同士騙し合い、殺し合い、命は犯され、死さえも冒瀆された！だけど・・・」

ステラ「500年前、神コスモは宇宙から舞い降り、王女の生命発生の瞬間、細胞に飛び込み王女とひとつになった」

ノマド「王女が、王冠を授かり、王となった時・・・この星を滅ぼすためにな」

オルカ「だけど私たちはもう一度人間にチャンスを与えたかったのよ。やり直せるチャンスを」
ステラ「だから、祈りを込めた宝剣で、コスモを封印したの」

ウイング「それなのに、この男はその宝剣を掘り出し、王女を解き放ってしまったんだ！」

ノマド「王女が王冠を手にしたとき・・・王女はステラとして覚醒する！」

オルカ「それだけは、何とかして止めなきゃならない」

セイレーン「そうだとするなら！・・・なおさら、この男を殺してはいけない。コスモを止めるチャンスを与えて」

ウイング「こいつがコスモを解き放ったんだぞ！」

ノマド「待て、ウイング！・・・コスモを解き放ったこいつなら、もしかして・・・わかった、こいつは生かす。それでいいんだな？」

オルカ「ノマド！」

ノマド「行くぞ、奴らを追う」

ステラ「あ、待って、ノマド！」

立ち去るノマドを追う、ステラ、オルカ、ウイング。

倒れるバンジー、スカイ、アボカド、ダンス、マリネ。

アバズレが現れ、バンジーを見つけて駆け寄る。

アバズレ「バンジー！わ！セイレーン！」

セイレーン「わ、じゃないでしょ！？今まで何してたのよ」

アバズレ「それが、あの二人が氷をちまちまちま集めたりしてるものだから、私飽きちゃって、クリオネ捕まえて妹たちのお土産にしようかなって・・・そうしたらはぐれちゃって」

セイレーン「まったく」

アバズレ「そうだった、バンジー！キヤー、大丈夫！？しっかりして！バンジー！（バンジーを抱き起す）」

バンジー「・・・アバズレか？・・・久しぶり」

アバズレ「どうしたのよ、バンジー！何があったの！？あなた、血が・・・」

バンジー「・・・いててて・・・こんな所で何してんだ？」

アバズレ「馬鹿ね、あなたを探しに来たんじゃない！」

バンジー「そうなのか、悪いいな、わざわざ。ところで、お前・・・ちょっと、老けたか？」

アバズレ「（バンジーを放り出す）死んでろ」

バンジー「ひでえなあ・・・あ、そうだ！コスモ！コア！大丈夫か！？いてて・・・おい、返事しろ！コスモ！？コア！？・・・コスモ・・・」
アバズレ「誰もいないわよ」
バンジー「消えちまったか・・・」

我に返るスカイたち。

スカイ「いつつつつ・・・あれ？どうしたんだ、いったい・・・」
ダンス「バンジー？・・・バンジー！？（駆け寄る）ああ、バンジーね！やっぱり生きてたのね！会いたかった！バンジー！（抱きしめる）」

バンジー「いたたたたたた！離せ、そこは刺された傷口が」

ダンス「きゃー、ひどい！誰がこんな事」

セイレーン・バンジー「お前だよ」

アボカド「バンジー船長！（駆け寄る）」

バンジー「おう、アボカド、今度は本物のようだな」

マリネ「バンジー船長、お久しぶりです（大泣）YO—SORO—」

バンジー「YO—SORO、マリネ。おっきくなったな」

マリネ「あ、いえ、以前のまんまです」

スカイ「バンジー・・・」

バンジー「遅えじゃねえかよ、スカイ」

スカイ「すまねえ、そこで可愛い子ちゃんに・・・声・・・掛けられ・・・ちまって（泣）」

バンジー「バーカ、男が簡単に泣くじゃねえ・・・」

気を失うバンジー。

みんな「バンジー！！」

セイレーン「（アバズレに小瓶を渡し）これを飲ませて。死海に注ぐヨルダン川の最初の一滴。傷もすぐに癒えるはずよ」

◆その6

氷の回廊。

M 「Bungy, He is a HERO！」

集まってきたペンギンが拍手をしている。

ダンス「バンジー、傷はどう？」

バンジー「ああ、セイレーンにもらった水飲んだら一発だよ」

スカイ「体に乗っ取られてたとはいえ、バンジー、すまなかった」

バンジー「本当だよ、仲間に刺されるとは死んだロコ爺さんもあの世で悲しんでるぜ（笑）」

マリネ「それじゃギャラリーも増えたところで、景気づけにもう1曲いきますか？」

バンジー「いいね！」

アボカド「わーいわーい、次は何やるの！？」

マリネ「サーカスのバンドです」

アバズレ「バンド!?でも楽器なんかないけど」
マリネ「そんなものいりませんよ!」

M 「サーカスにおいて」

一緒に踊って喜ぶペンギンたち。

バンジー「それじゃあそろそろ、第8番目の海・地底海まで、王家の王冠とやらをいただきに行きますか!?!」

スカイ・マリネ・アボカド・ダンス・アバズレ「OK、バンジー!」

M 「我ら罪深き神の僕」

第8番目の海、地底海へ向かうバンジー一行。

第8番目の海・地底海。

コア「王女、こちらです」

コスモ「コア、なんだか怖いわ。それにどんどん暑くなってきた・・・こんなに暑いのは初めてだわ・・・本当にバンジーがここで待つように言ったの?」

コア「ええ。彼が必ず後から行くから先に行けと」

コスモ「そう・・・」

コア「王女、着きましたよ、これをご覧ください。これが第8番目の海、南極大陸の地下深く眠る幻の海、地底海です!」

真っ赤に煮えたぎり、マグマを吹きあげている地底海。

コスモ「まあ、なんて美しいのかしら・・・まるで太陽が融けたみたいだわ」

コア「マグマです。ここは大陸最高峰の山、マウント・ビンソンの地下深く。この燃える海は、マントルも通り抜け、地球の真ん中の核とつながっています」

コスモ「地球の核?」

コア「その温度は7000度。全てのものを一瞬にして跡形もなく消し去ることが出来る、まさにソドムとゴモラを焼き尽くすとされる神の火です」

コスモ「でもなぜ、私をここに?」

コア「それは、もう一度初めからやり直すためです」

コスモ「え?」

バンジーが現れる。

バンジー「ふー、やっと追いついた。コア、ひどいじゃねえか、置いてけぼりくらわすなんてよ。いったいどうしたんだ?すっかり暑ちいな、ヴィンランドのサウナの100倍だ」

コスモ「バンジー! (駆け寄り抱きつく)」

バンジー「おう、おう、おっとととと、大丈夫だったか?コスモ」

コア「すみません。とにかく王女の命を守りたくて、あの場から逃げ出してしまいました」
バンジー「まあ、いいけどよ、それよりこれからどうしたらいいんだ？ここにいいのか？王家の王冠は」

コア「ええ。あそこに」

地底海を指さすコア。

バンジー「おいおい、こんな火山が口開けたみたいなどに王冠があるわけねえだろ？あったとしてもとっくに融けて」

コア「ええ。融けています。王家の王冠はすでにこの地球とひとつになって、王女が来るのを待っていたのです」

バンジー「何だと？」

コスモを引き寄せ地底海に近づくコア。

バンジー「おい、なにすんだ？コア、馬鹿な真似はやめな」

スカイ・マリネ・アボカド・ダンスが追いつく。

ダンス「早すぎるわよ、バンジー・・・死にかけてたくせに、すごい足ね」

スカイ「おい、バンジー、どうした？・・・この子が王女コスモ？」

コア「これから、王女と私はこの海に身を投じます。融けた王冠は王女の元に集まり、王女は晴れて王位を継承し王となるのです。その時こそ、宇宙全能の神コスモは覚醒し、その力によって地球は燃え上がり、氷は融け、海も山も炎を吹き上げ、全てを焼き尽くし、新しい星へと生まれ変わるのです！」

バンジー「やっぱりな。王家を再興する気なんて更々なかったんだろ？」

コア「騙したことは謝ります。ですが私はこうするように作られています。ロボットですから。バンジーさん、ここまでありがとう。神々の妨害をあなたのおかげで回避できました。さあ、王女参りましょう、もうあまり時間が無い」

銃声が響く。

アバズレがキースとホーキングを連れて現れる。

アバズレ「早く早く！」

キース「動くな、その木偶人形！」

ホーキング「博士、右の胸、右の胸を狙ってください！（文献をめくり）あの形の古代ロボットの急所は右の胸です。わ！あのロボット、宇宙人が作ったって説があるらしいですよ！」

神々が現れる。

ノマド「よせ！コスモを覚醒させてはならない」

オルカ「どんなに人間がおろかでも、地球は人間だけのものじゃないわ」

ステラ「この星はまだ生きてる！引き返せないとしても、まだ生きてるの！」

ウィング「祈りの鎖を解こう・・・王女に記憶を取り戻させるんだ」

苦しみ出すコスモ。

コスモ「……うう……痛い……頭が……頭が痛い！」

コア「王女……こちらへ……もう時間が無いのです……急がないと……」

コスモを淵に連れて行こうとするコア。

アバズレ「撃って……撃って！」

銃声が響き、コアの胸に命中する。

キース「動くなと言っただろう……」

動きが悪くなるコア。

よろめきながらバンジーの方に来るコスモ。

コスモ「(頭の痛みが弱くなっていき)……思い出した……あの日、あの王冠を受け継ぐ日……私のどこか奥の方から声が聞こえたのよ……天地創造……いや、私がコスモよ!……違う、違う……違う!違う!違う!……そんなことあるわけない……どうして私が世界を終わらせなきゃいけないの!?!……」

バンジーの前にたどり着いたコスモ。

コスモ「……なんだか力が抜けて来たわ……息が苦しい……(どんどん年をとり老いていく)……氷河の中の生活はとても寒かったけれど……お父様は優しく……コアはいつもそばにいてくれて……本当に暖かかった……どんな吹雪の日でも私はいつだって安心して眠ることが出来たわ……コア、ありがとう……だけど、あの時、私は自分が自分じゃないことを知った……そうして500年間も氷の中で、長い夢を見ていたのね……バンジー、お願いがあるの……私を殺してちょうだい……」

バンジー「……出来ねえよ、そんなこと……俺は人を殺さないって言ったろ?掟だ、あきらめてくれ」

コスモ「私は人間じゃないもの……だから……お願い……せめて……人間じゃないとしても……人間らしく死にたい……お願いよ……バンジー……」

コア「やめろ……やめてくれ……」

セイレーンが現れる。

バンジー「セイレーン……」

セイレーン「(うなずき)命より大事なものはあるわ。生きることと死ぬことは、同じよ」

バンジー「……わかったよ……神殺しだ、高くつくな」

コスモ「ごめんね、バンジー……ありがとう……さようなら……」

バンジー「おう……じゃあな」

コスモの胸に剣を突き立てるバンジー。

絶命するコスモ。

コア「王女ー！！……王女……お守りできずに……許してください」

海底海に身を投げるコア。

轟く爆発音。

地球の音だけが響いている。

◆プロローグ

南極大陸の海岸。よく晴れた穏やかな海。

寄港の準備をするホエール号の一行。

ぶらつくアバズレ。

バンジー「かー、いい天気だな！そーいや今は北半球じゃ夏か！？それじゃメキシコあたりまで北上してバカンスといくか！？」

スカイ「そりゃ名案！」

バンジー「アバズレ、お前はとうするんだよ？」

アバズレ「私？私はもう少し彼といふかなって、しばらくここで研究調査を続けるっていうから、ご飯とか身の回りの事とか、手伝ってあげたくて。キャハ！」

バンジー「恋人ごっこか？懲りねえ女だな、好きにしる」

アバズレ「するー、好きにするー」

マリネ「バンジー船長そろそろ出航の準備が整いましたよ」

バンジー「そうか、それじゃ出発すつか！？」

キースとホーキングが激論を交わしながら現れる。

ホーキング「だから博士の理論は古いんですよ！旧態依然とした学会の悪癖に染まってるんです、完全に！」

キース「バーカを言ってもらっちゃ困るよ、ホーキング君！君みたいなポツと出の若造に何がわかるっていうんだね！？」

ホーキング「若造ですって！？お言葉ですが博士、そういった年齢、性別、国、宗教、肌の色で人に優劣をつける思想こそが偏見や差別を助長しているんです！」

キース「失礼な！私は差別主義者などではない！撤回しろ！撤回！」

ヒートアップする二人。

ダンス「ちよっとガリ勉君いじめないで」

キース「私は別に……いじめてなど」

ダンス「彼はこれから未知の薬を発見して大金持ちになるんだから。邪魔しないでしっかり手助けするのよ？ガリ勉君、連絡待ってるからね！」

スカイ「かわいそ、若くて真面目な天才学者が強欲女の餌食にされるなんて」

アボカド「本当、涙があふれて見てらんない、見てらんない」

ダンス「ちよつと失礼ね！私はただ、わざわざ南極まで来たのに王冠は手に入らなかったし、宝剣はマグマに融けて無くなっちゃうし・・・だから代わりに金の卵にツバ付けとこうかなって」

マリネ「めちゃくちや金目当てが前面に出てますけど？」

ダンス「ふん！」

バンジー「しかたねえだろ。あきらめろ、ダンス。でも、こうやって生きてんだからよ」

ダンス「まあね、500年分一気に年老いて、砂になつて消えてった彼女に比べたら・・・幸せよね！？」

バンジー「そうだろ？だから、今日からまた一緒に頑張ろうぜ」

スカイ「どうした？バンジー、お前と一緒に頑張ろうだなんて、また嵐が来るんじゃないか？」

マリネ「あはははは、でもいいじゃないですか、今日からまた一緒に頑張ろう、いい響き」

バンジー「何度も言うんじゃないやねえよ、馬鹿野郎、思わず言っちゃっただけなのに、恥ずかしい・・・」

アボカド「あははは、あ、ほら見て！渡り鳥！」

スカイ「本当だ、すげえ数の群れだな」

ダンス「どこに行くんだろう？」

バンジー「さあな、だけど・・・すげえな」

マリネ「何がですか？」

バンジー「生きてるってことはよ！帆を上げろ！」

スカイ・マリネ・アボカド・ダンス「OK！バンジー！」

たなびく帆。進む船。

手を振るアバズレとホーキング、そしてキース。

船を見送るセイレーンと神々たち。

M 「好候 YO—SORO—！」

おしまい